

The Divided Self and the Twilight of Southern Aristocracy in William Alexander Percy's Lanterns on the Levee

小谷, 耕二
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/1786412>

出版情報：英語英文学論叢. 66, pp.1-13, 2016-03-25. The English Language and Literature Society
バージョン：
権利関係：



W. A. パーシー 『護岸の灯火』

— 引き裂かれた自己と南部貴族の黄昏 —

小谷 耕二

本稿はウィリアム・アレクサンダー・パーシー (William Alexander Percy) の自伝『護岸の灯火』¹ (*Lanterns on the Levee: Recollections of a Planter's Son*) を取りあげ、その生と思想を検討し、そこにどのような南部の文化的自画像が描きだされているかを考察するものである。パーシーおよびその著作は南部文学史、思想史では一定の位置を占めているが、日本ではあまり知られているとはいえない。そこで紹介の意味も兼ねて、まずその生涯を概観し、主要な先行研究にもとづいて文学史的、思想史的位置づけを確認しておきたい。次いで、〈父との関係〉と〈引き裂かれた自己〉をキーワードにこの自伝の意味を考察することにする。

I

パーシーはミシシッピ州北西部のいわゆるミシシッピ・デルタと呼ばれる地域のグリーンヴィルに1885年に生まれた。そこから120マイルほど離れた同州オクスフォードでその生涯の大半を過ごした高名な小説家ウィリアム・フォークナー (William Faulkner) と同時代の人物である。パーシー家は当地きっての貴族的名家であり、彼がその名にちなんで命名された祖父は南北戦争後のデルタ社会で白人支配を再確立した指導者であり (Hobson 274)、また弁護士であった父リロイ (LeRoy) は広大な農園を所有しており、1910年にはミシシッピ州の連邦上院議員に選出されている。家系をさかのぼれば、父方は英国中世のノーサンバーランド

1 作品の表題を逐語訳すれば「堤防のカンテラ」とでもなるのだろうが、作品の流麗で、抒情的、かつ格調高い文体にふさわしい邦題として、意識ながらも、後藤和彦が『敗北と文学』で用いたものを借用している。

伯爵 (the earls of Northumberland) の血筋を引き (Hobson 274)、母方もフランス系の貴族につながるという (LL 36)。

パーシー自身は裕福な農園主の息子として育ち、自宅と私立学校で教育を受け、スワニー・カレッジに学んだ。その後ヨーロッパ遊学を経て、ハーヴァード大学のロースクールを修了すると、グリーンヴィルの父のもとで弁護士業を開業。その傍ら詩作に従事し、『かつて四月に、その他』(*In April Once and Other Poems*, 1920年)をはじめとする数冊の詩集を出版している。ちなみに若き日のフォークナーが『かつて四月に、その他』の書評を書いている。² 第一次大戦中はヨーロッパでの従軍経験もある。これはのちにふれることになるが、いわゆるレッドネック (red-neck) たるプアホワイトの圧倒的支持を得ていたジェイムズ・K・ヴァーダマン (James K. Vardaman) と父との政争をみずから経験し、また1927年のミシシッピ川の大洪水ではその救済支援事業の指導者として働いた。生涯独身であったが、のちに高名な小説家となるいとこ違いのウォーカー・パーシー (Walker Percy) とその第二人を引きとって育てている。そしてこの『護岸の灯火』を出版した翌年の1942年癌でその生涯を終えている。

フレッド・ホブソン (Fred Hobson) によれば、1850年代になって南部を独自の運命と使命とをもった「精神的国家」とみなす考え方が生まれ、南北戦争後には旧南部の文化的伝統や価値観をノスタルジックに擁護する保守的懐古派 (apologists: a school of remembrance) と、恥辱と罪悪感にさいなまれつつ過去を吟味するリベラル派 (critics: a school of shame and guilt) の二つの陣営が存在することになったという (Hobson 5)。ホブソンはその両派の系譜を歴史的にたどっているが、1930年代、40年代については保守的懐古派としてパーシーを、リベラル派としてはウィルバー・J・キャッシュ (Wilbur J. Cash) を取りあげて論じている。この両者はいくつかの点で好対照をなしており、この二人を併置して論じるのは妥当な試みである。ただ、ここではその比較には深入りせず、パー

2 フォークナーの評価は、パーシーが、近代の暗闇に眼をふさぎ、それに脅かされている単純さや中世の華やかでロマンティックな野外劇で眼をいっぱいにしていく少年みたいだというものである (Hobson 276)。勘所をつけていて、フォークナーの批評眼が窺われる。

シーが懐古派の流れに属することをひとまず確認しておけばよい。

この位置づけについては基本的には大方の意見が一致しているといえる。ここで主な先行研究を概観しておこう。過去にたいする向きあい方を、過去をそのまま繰り返そうとする「反復」(repetition)、過去の伝統を吟味しようとする「回想」(recollection)、過去を吟味し脱神話化したうえで現在を再組織しようとする「現実の再構成」(reconstitution of “reality”)の三つの段階に分類するリチャード・キング(Richard King)は、『護岸の灯火』を「反復」と「回想」のあいだに位置づけているようで、パーシーをニーチェ(Friedrich Nietzsche) 謂うところの「絶望したモニュメンタリスト」(King 91)とみなしている。キングによれば、パーシーの場合、「回想が過去の反復の欲求につながっていたが、同時にパーシーはそうした反復が不可能であることを理解していた」(King 91)のである。ホブソンは『護岸の灯火』は南部の最良の伝統を擁護し、回顧するために書かれた作品であり、パーシーの属する貴族階級がほとんど消滅しかけ、代わりにプアホワイトがのしあがってきているという時代認識があることを指摘している(Hobson 278)。またバートラム・ワイアット・ブラウン(Bertram Wyatt-Brown)は、パーシーが現実には存在しなかった貴族的な南部の安楽と完璧な礼儀正しさを存続させようとし(Wyatt-Brown, “Will Percy” 14)、ただそれができない自分の限界を補うためかなりの歪曲を行って、神話化により失われた南部を回復しようとしていることを指摘している(Wyatt-Brown, “Will Percy” 31)。懐古派パーシーの旧南部の伝統的価値観の擁護や神話化の裏側には、それが失われてしまい取り戻すことができないという絶望ないしは諦念が存在していると考えられる。つまり、後藤和彦が指摘しているように、パーシーは過去と現在のギャップに引き裂かれていたとみてよい(後藤 219)。

この自己の亀裂はさまざまな形をとって現れている。この自伝が南部のパターナリズムの矛盾を記録し、それを解決しようとしているテキストだと考えるスコット・ロメイン(Scott Romine)は、パーシーは貴族的なパターナリズムが不可能となった世界にあって、結局は審美的な無時間の世界へと逃れていくのだとみている。パーシーは現実の歴史の空間にみずからの居場所を見いだすことができずに、主観により審美的に構築された「故郷」に生きるしかなかったのだというのだ。そしてパーシーが語る物語は結局のところ「流浪」の物語なのだ結論している

(Romine 148)。南部には「南部的告白文学」(Hobson 16) というものが成立していると述べるホブソンが指摘しているとおおり、「南部について語ることは告白の行為である」(7-8)。逆から言えば、南部では自伝を書くことは南部の文化的自画像を描くことと表裏一体である。とすれば、自己の内的亀裂には南部の文化的自画像の亀裂が何らかの形で反映しているということになるだろう。こうした亀裂を、マッケイ・ジェンキンス (McKay Jenkins) は独特の視点からあぶりだしている。ジェンキンスによれば、パーシーは行き場を失った自分の存在状況を黒人のそれと結びつけて表現している。南部白人としてのアイデンティティの亀裂が黒人のイメージをとおして語られているというのだ (Jenkins 94)。近年のホワイトネス研究に通底する視点と言っていいたいだろう。また、パーシーの同性愛的傾向に焦点を当てたベンジャミン・E・ワイズ (Benjamin E. Wise) による伝記が刊行されて以降、パーシーの内的分裂を同性愛の視点から解釈する試みも出てきている。³

このように『護岸の灯火』の研究の流れをおおまかに見てくると、パーシーは懐古派に属するとは言いながらも、手放して過去の南部を賛美しているのではなく、むしろその背後で演じられている内面のドラマこそがこの自伝の読みどころではないかと思えてくる。そしてパーシーの自己亀裂は、たとえばキャッシュユのような南部批判派の自己にたいする疑念や喚問と、それほど遠く隔たってははいないのではないかという印象すら受けるのである。

II

『護岸の灯火』においてはデルタ社会の構造は三つの階層から成っている。かつて奴隷を所有していた上流の地主階級、プアホワイト層、黒人たちの三つである。ホブソンが指摘しているとおおり、『南部の精神』(*The Mind of the South*) においてキャッシュユが描きだしたような独立自営農民 (the yeoman) や、一種のフロンティア・マンとして独力で地主

3 パーシーの同性愛的傾向については、すでにキング (King 96-7) やワイアット・ブラウン (Wyatt-Brown 25-6) も言及しているが、ふかく掘り下げているわけではない。最新の研究としては、ベッツィ・ニース (Betsy Nies) のものがある。

階級になりあがった頑強な「中心的人間」(the man at the center) はパーシーの見取り図には存在していない (Hobson 278)。パーシーはもちろん最上層の地主階級に属するわけだが、この社会構造をどのように捉え、またそのなかでの自己像をどのように描きだしているだろうか。

キングは、1930年代の多くの南部作家たちにとって父親と家族とは自分自身と過去を理解するための「媒介的シンボル」となっており、パーシーも例外ではなかった旨述べている (King 91)。パーシーにとって祖父と父とは南部の伝統的価値観を体現する英雄的な存在であった。前述したように、その家系はヨーロッパの貴族にまでさかのぼることができると言われていただけではなく、祖父は南北戦争中に「デルタの灰色の鷲」と称された武勇の人であり (Wyatt-Brown, “Literary Percys” 42)、ミシシッピ州議会の下院議長を務め、黒人の共和党勢力を放逐した (Jenkins 85)。また広大な農園主となった父は祖父のあとを受けて「護岸委員会」(the Levee Board) を取りしきり、地元で大きな政治的影響力をもっていた (Wyatt-Brown, “Literary Percys” 42)。

こうした伝説的栄光に包まれた祖父と勇敢な行動の人たる父リロイのもとで、子ども時代のパーシーは勇敢さや名誉、ノブレス・オブリージといった伝統的美徳への崇敬の念を育む一方で、その高い規範にみずからがとうてい到達し得ないという思いをひそかに抱いていたと容易に推測される。自分が幼児だったころに亡くなった祖父はまだしも、日々身近で仰ぎみる父の存在感は圧倒的であった。パーシーは、父は最高の銃の使い手であり、最高の演説をし、もっとも公正な思索家であり、もっとも賢明なる人物であり云々と、文字どおり最高級の賛辞で父を称え、「太陽神アポロと大天使ミカエルを合わせたみたいに美しく、こんな目も眩まんばかりの父をもつことは辛いことだった。隠者になりたいと思うのも無理はなかった」(LL 57) と書いている。こうした大袈裟な口ぶりにはいくらかユーモアの気配もあるが、しかしそこに本音の気持ちが潜んでいることは疑えないだろう。この一節のすぐ前のところで、ナナ叔母さん (Aunt Nana) といっしょにセンチメンタルな大衆小説と思われる『絹の鎖に繋がれて』(*In Silken Chains*) を読んでみると、父にそんなくだらぬものはやめて、『アイヴァンホー』(*Ivanhoe*) を読めと叱責される場面がある。父は『アイヴァンホー』を年に一度は読むそうなのだが、二人で読んでみると、ナナ叔母さんは登場人物のレベッカ (Rebecca) の

ことで涙にくれて病気になってしまうほどなのをたいして、パーシーは「騎士の英雄的行動に感化されるどころか、もしそれが砂漠に通じる洞穴で行われるのであれば、修道僧の生活に夢中になってしまう」(LL 57)のである。この二つの場面を併置することによって、パーシーは偉大な父と「隠者」のような性向の自分との対比を一種ユーモラスなまでに強調しているといえるだろう。

この父と自分との落差は、長じてもパーシーの存在に亀裂を走らせている。ワイアット・ブラウンは、小柄で女性的であったパーシーが戦争を好んだことにその複雑な人物像の一つの表れを見ていたが (Wyatt-Brown, "Will Percy" 13)、それは息子のことを諦めた父から自分にたいしては求められていない期待に応えたいという欲求のなせる業であったかもしれない。キングは、第一次世界大戦が、パーシーやその他の当時の若者たちにとって、南北戦争で勇敢に戦った祖父や父にたいして自分の存在をアピールする機会を提供したことを指摘している (King 93)。「ちびの分隊」("The Peewee Squad") と題された章で、入隊のための厳しい訓練に「ちびの」(つまり、父のように偉大ではない) パーシーが必死で耐えぬく様子が詳述される背後には、そうした父に認められたいという動機が隠されているとも考えられよう。

しかし、父にたいする自己証明の密かな欲求が顕著に見て取れるのは、この自伝のクライマックスをなすエピソードである1927年のミシシッピ川の大洪水であろう。ワイアット・ブラウンによれば、この歴史的な大洪水では数千人もの死者だけではなく、70万人以上の飢えかけた難民が出た。2万7千平方マイルもの地域が水につかったとのことであるが、それはコネティカット、マサチューセッツ、ニューハンプシャー、ヴァーモントを合わせたのに匹敵する広さで、波の高さはときに30フィートにもなったという。そして水が退くのに4か月かかったとのことである。パーシーは赤十字の後援を受けて洪水救援委員会の委員長となり、救援活動の指揮にあたる。グリーンヴィルでは住民がみな堤防に避難し、大混乱に陥るが、パーシーの大車輪の働きでなんとか秩序を回復する。(Wyatt-Brown, "Will Percy" 19-20) ただ、問題が生じる。州兵に出動してもらい白人住民を他の地域に無事に避難させたあと、黒人を避難させる段になって、パーシー家の友人たちや農園主たちから反対の声がかかる。いったん黒人たちがグリーンヴィルを離れてしまえば、もう

戻ってこなくなるだろうと憂慮したのである。このことで父と話をしたパーシーは、「あの人たちは自分の懐ぐあいだけ考えているが、自分は黒人たちの福利を考えているのだ」(LL 257)と憤慨する。そこで、父の示唆により救援委員会の主要メンバーと再度話し合いをもつと、以前は自分に賛成してくれていたメンバーがすべて手のひらを返してパーシーに反対するのである。あとでわかったのだが、じつは父リロイが根回しをしていたのであった。父も黒人を避難させれば、労働力が失われ、町の経済にもっと大きな打撃になるだろうと考えていたのであった。

この出来事はパーシーにとって衝撃的なことであっただろう。水が退いたあとの復興作業の指揮を別の人物に譲り、日本へと旅立ったことからそれは窺える。しかし、パーシーはこの未曾有の災害中に一致団結して英雄的な行動を見せていた住民たちが、やがていつもの普通の人間に戻っていったことを述べるだけで、父にたいする怒りや恨みごとを一切書いていない。⁴ この沈黙はどうしてであろうか。

「余興の神々の黄昏」(“A Side-Show Götterdämmerung”)という章で、パーシーは南部貴族についてこう述べている。

階級としては南部貴族は消滅していると思うが、その階級が俗悪だとして侮蔑したものや素晴らしいとして大切にされたものは、南部の端から端までいっぱい散らばっている個々の人々によって今なお侮蔑され、大切にされている。そうした個々の人々は商売人の世界に生まれていてもまだ貴族であり、みずからの同類を見分ける不気味な能力をもっている。彼らのはっきりとした特徴は、おそらくその心が、生き延びることを可能にする美德にではなく、生き延びることを価値あるものにする美德に向けられていることであろう。(LL 62)

また「少年の英雄たち」(“A Small Boy's Heroes”)という章では、デルタの社会の昔の賢人たちは、どんな政治形態であっても、それを動かす人間がすぐれていない限りすぐれたものとはなり得ないということを確認

4 この点についてはキングも指摘している (King 94)。ただしその意味の解釈はまったく異なっている。

しており、自分たちの最大の義務はそうしたすぐれた人物を見つけ、選挙で選んで公職につけることだと考えている旨、述べている (LL 73)。こうした箇所から窺えるのは、公的な制度ではなく、人物を重視する態度である。南部の道徳的凝集力が崩壊している現在、公的な制度としての貴族は消滅してしまったが、貴族と呼ぶにふさわしい人物は存在している。美德や価値というものは、制度ではなく人を通して受け継がれていく。

こうした考え方からすると、大洪水のあとのパーシーの沈黙には何か深い意味を読みこめるのではないだろうか。黒人たちを避難させようとするのは、白人の優位性を信じていたがゆえにパターンリズム的限界をもってはいたが、パーシーにとっては人道的かつ英雄的な行為であった。ところが父は起こりうるかもしれない経済的打撃を避けることを優先した。それは公的な政治判断としては正しいことであったかもしれない。共同体の指導者としては、それこそが取るべき道であったかもしれない。しかし、伝統的な美德や価値を父という人物を通して学んできたパーシーはそこにある種の乖離を感じたのではなかろうか。それは父が美德や価値を具現しそれと一体になっていた存在から、制度的存在と化した瞬間ではなかったろうか。そう思って読むと、水が退いたあと英雄的なふるまいを見せていた住民たちがいつもの姿に戻っていったというエピソードは、パーシーにとっての父の意味の変貌の象徴的表現とも見えてくる。「上下逆さまになって」(“Bottom Rail on Top”) という章で、パーシーは「若い頃、わたしは父を限りなく崇拜してはいたが、ふかく愛してはいなかった」(LL 141) と漏らしている。ここに見られるギャップは上述の乖離と通底するものであろう。洪水対策の失敗がパーシーに屈辱感と父に対する引け目をもたらしたことは否定できないだろうが、同時に父へのまなざしが崇拜一辺倒から微妙に変化しているように思える。父への幻想が崩壊するというほど大袈裟なものではないにしろ、パーシーの心の深層で密かに剥離していったものがあったと考えるのは、見当違いだろうか。

III

パーシーが懐古派とみなされてきたのは、名誉や勇気やノブレス・オ

ブリージといった南部貴族のもつ伝統的価値観への賛美のゆえでもあったが、同時にその黒人観や分益小作制 (sharecropping)、プアホワイトにたいする見方も大きな要因である。

黒人に関して、現在の常識から見ると著しく差別的なステレオタイプの見方が作品に散見される。過去も未来も考えず、ただ現在だけに生きていて、怠惰で、暴力的で、のんきで愚かで無邪気で、知性において劣っていて、云々といった具合である (LL 23, 299, 300)。ただ自伝の結末近くには次のような一節もある。

正義をふりかざす者たちは南部の人種関係の嘆かわしい状況にいつもうろたえてしまう。一方、わたしは南部の人種関係の素晴らしい状況にいつも驚嘆し歓喜の念を覚えている。(中略) わたしはつよく言いたいのだが、これほど異なった二つの人種が、これほど摩擦もなく、比較的平穏に仲良く肩を並べて暮らしているのは信じがたいことなのである。こうした結果はひとえに行儀のよさに由来している。南部の黒人は世界で最も美しい行儀作法を身につけており、彼らに学んだ南部の白人が、僅差でそれにつづいているのではないかと思う。(LL 286)

別にパーシーの黒人観を弁護しようというわけではもちろんないが、こうした見方には、北部やリベラル派の批判にたいする常套的な反論という面もあるが、同時にともに生活していることによる実感としての人種関係への理解が窺われる部分もあるように思える。このほか、子どもの頃の乳母ナイン (Nain) に対する愛着や、これはキングが指摘していることだが、「ありていに言ってしまうればわれわれはおたがいまったく理解してなどいないのだ」(LL 299) という言葉などは、そうした例であろう。そしてそれは「人種に関しては、われわれがそうあってほしいと思っているほど、パーシーは引き裂かれていない存在ではかならずしもないのだ」(King 89) ということを示していよう。

分益小作制に関しては、「農園主、分益小作人など」(“Planters, Share-Croppers, and Such”) という章でこう述べている。

分益小作制は、教育のない者、技能を身につけていない者に安

心感を与え、利益を得る機会を与えるべくこれまでに考案されたなかで、最良の制度の一つである。そこには欠点は一つしかない。つまり、その制度によって気づかれることもなく、罰されることもなく収奪するチャンスを与えられた人間が、それを動かしていかなければならないということである。失敗は制度自体にあるのではなく、その制度の契約上の義務に恥じないような生き方ができないところにある。失敗は人間にあるのだ。(LL 282)

ここに示された見解は、制度的搾取の構造にまでまなざしが届いていない点で、パーシーの限界があらわになっている。同時に農園主の義務不履行に失敗の責任を求めている点には、制度よりも人を重視する姿勢が如実に表れている。

プアホワイトにたいするパーシーの見方には、それを埋め合わせするようところがまったく感じられない。「デルタの人々」(“Delta Folks”)という章には次のような一節が見られる。

わたしは主なる神が許すように、彼ら [プアホワイト] を許すことができる。しかし彼らを称賛し、信用し、愛することは、これは断じてできない。彼らは知的にまた精神的に黒人よりも劣っている。だから黒人を憎むのだ。彼らは黒人よりも劣っているのではないかと思っているがゆえに、自分自身にたいして優越感を証明するために黒人に何かをしでかさねばならないのだ。(LL 20)

キングが指摘しているように、ここに見られるパーシーのプアホワイトへのむきだしの敵意には、父が連邦上院議員の椅子を賭けて、プアホワイトの地主階級への不満や黒人への隠れた劣等感を扇動し汲みあげて戦ったヴァーダマン相手の熾烈な選挙戦の反響があることは間違いないだろう (King 89)。またプアホワイトの黒人にたいする敵意の裏側に隠れた劣等感を見て取るのも、一つの洞察といえる。しかし、パーシーのプアホワイト観はやはり一面的だとその謗りは免れないだろう。たとえばフォークナーの短篇「ウォッシュ」(“Wash”)と比較すれば、一人の人間としてプアホワイトを捉えるまなざしがパーシーには決定的に欠けていることがわかる。フォークナーは黒人たちからも侮蔑されているプア

ホワイトの主人公ウォッシュの生の尊厳をじつに感動的に描いている。一方、パーシーは制度よりも人間を見るという態度を重視しながらも、その態度がここではまったく見られないのである。

このように見てくると、貴族階級にたいしてパーシーが抱いていたような、みずからの存在に亀裂を走らせるようなアンビヴァレンスが、黒人やブアホワイト、また分益小作制度にたいする見方にはあまり見られないか、あるいはまったく影をひそめていることがわかる。これは、結局のところこの自伝が貴族階級に属する父との関係を主要な主題としていることに由来しているのかもしれない。また、社会構造を制度として客観的に捉えるような視点がパーシーには資質的にあまりないことも理由の一つかもしれない。自分の内面の亀裂に眼を向けることには長けているが、制度と人間の両者を視野に入れる複眼性はまだ獲得していないのである。そういう意味では、パーシーが描きだす南部の文化的自画像にはかなり偏った濃淡があるといえる。

IV

大洪水のエピソードのあと、作品の構造に変化が見られるように思うのは筆者だけだろうか。洪水の章までは、最初の二章でミシシッピ・デルタとそこに暮らす人々を概括的に紹介したあと、通常の自伝の定石どおりに、家系や祖父母の紹介、描写に始まって時系列に沿って生涯の出来事が語られてゆく。ところが洪水の章のあとは、物語風の叙述ではなく、農園主や分益小作制や人種関係についてのパーシー自身の見解が生のまま表明される。そうかと思えば、日記の断片のみで一章が費やされてもいる。そして最後の二章でまた物語風の叙述に戻り、自分の庭園と共同墓地の話が語られるのである。この作品構造の揺らぎには何か意味があるのだろうか。

一つ考えられるのは、やはり父との関係である。洪水の次の章は次のように始まっている。

父はこれまでわたしが知っているなかで唯一の偉大な人物である。そして母がいなければ偉大ではあり得なかったであろう。彼らは洪水の二年後に、ありがたいことに二、三週間と時を隔てる

ことなく、亡くなった。彼らがいないと、わたしの人生は余分なものに思われた。(LL 270)

父と母の死後、パーシーは自分の生を余生のように感じているという。それは充実した余生というよりも、生の充足感が失われ断片化した余生ではないだろうか。空想をたくましくすれば、洪水対策で意見が食い違い、父とのあいだで何かが剥離していったとき、じつはパーシーは父とは異なる世界に入ってしまったのではないだろうか。父にたいして自己証明をすべく奮闘していたその眼前で、自分の生を意味づける存在が消えていったように思えるのである。農園主や分益小作制や人種関係に関する見解はパーシー自身のものというよりも、ことによると父リロイの見解をいわば形見のごとく並べたものかもしれない。公的な制度となってしまった父にふさわしく、南部貴族の公的な見解として、おそらくその空疎さを意識しつつ、パーシーが父にたむけているのかもしれない。もちろん、論理の飛躍、空想にすぎないと言われれば、それまでである。しかしそう空想してみたくなるほど、何か空ろな生気のなさ、あるいはもっと極言すれば死の雰囲気漂っているように感じられる。

ロマインは最後から二番目の章「庭園のカラス」(“Jackdaw in the Garden”)における庭園のイメージに「そうでもしなければその秩序に還元できないような経験に安定した秩序を主観的にかぶせているのだ」と述べ、それが「農園の小型版」であり、現実のなかでは不可能な一種の審美的空間を表象していると考えている(Romine 146)。しかし果たしてそうだろうか。仮にそうだと考えるとしても、その審美的空間は充実した空間であるというよりも、それが現実の前では無力であることこそを示しているように思われる。

このように見てくると、先行研究の多くが主張しているように、パーシーが南部の伝統的価値観を無条件に擁護しその回復を願っているというような解釈に諸手を挙げて賛同することはできないだろう。むしろパーシーは、伝統的価値観の残骸のなかになすすべもなく立ちすくんでいると見たほうがいいのではなかろうか。洪水の章以降の物語叙述の揺らぎは、そうした南部貴族の世界観の空疎な残骸、断片化の形象化であるように思われる。パーシーはいわば南部の英雄的神々の黄昏のなかに、みずからの内面に亀裂をかかえたまま、抛り所もなく茫然と立ちす

くんでいるのではなからうか。さらに言えば、そこからリベラル派的な歴史観の胚胎する場所までは、それほど遠くはないであろう。パーシーが立っている場所はそうした位置であったように思える。

参考文献

- Hobson, Fred. *Tell About the South: The Southern Rage to Explain*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1983.
- Jenkins, McKay. *The South in Black and White: Race, Sex, and Literature in the 1940s*. Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1999.
- King, Richard. *A Southern Renaissance: The Cultural Awakening of the American South, 1930-1955*. New York: Oxford UP, 1980.
- Nies, Betsy. "Rattling the Cage: Homoeroticism, Sublimation, and Southern Mores in the Works of William Alexander Percy." *Mississippi Quarterly* 65.4 (2012): 465-89.
- Percy, William Alexander. *Lanterns on the Levee: Recollections of a Planter's Son*. 1941. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1989.
- Romine, Scott. *The Narrative Forms of Southern Community*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1999.
- Wise, Benjamin E. *William Alexander Percy: The Curious Life of a Mississippi Planter and Sexual Freethinker*. Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2012.
- Wyatt-Brown, Bertram. *The Literary Percys: Family History, Gender and the Southern Imagination*. Athens: The University of Georgia Press, 1994.
- _____. "Will Percy and *Lanterns on the Levee* Revisited." *Storytelling, History, and the Postmodern South*. Ed. Jason Phillips. Baton Rouge: Louisiana State UP, 2013.
- 後藤和彦『敗北と文学 アメリカ南部と近代日本』東京：松柏社、2005。

(付記) 本稿は科研費（課題番号24520293）の助成を受けた研究成果の一部である。